
たびかぜとたんぽぽ

七浦彩

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

たびかぜとたんぽぽ

【Nコード】

N5142A

【作者名】

七浦彩

【あらすじ】

たんぽぽと出会ったたびかぜ。彼は世界を旅しながらたんぽぽと仲良くなっていく。

たびかぜは今日も色々な土地の上をわたっていきます。

「ああ、なんてきれいな色をしたみずうみなんだろう！ あそこで水浴びをしたらさぞかし気持ちがいいだろうなあ！　ぴいう、ぴ、ぴい！」

たびかぜはまいにちせかいじゅうを回っておりまして。そのたびにあたりしできごとをみつけては、お日さまやお月さまやお星さまに報告するのです。

「お日さま、お日さま。すこし光を弱くしてはもらえませんか、ほら、あそこの池。せつかくかえるの子が生まれたのに、干上がってしまいます」

「む。そうか。では雲にかけを作ってもらおう」

「ありがとうございます」

そうやってたびかぜはみんなを守って過ごしていました。
ある日のことです。

雪をはこんでいたたびかぜは、お日さまの光がいつそう強くなったのを感じました。

（ああ、もうすぐ春になるんだ）

たびかぜはうれしくなって、そしてちよつとさびしくなって、きれいな雪のこなをばらばらとまきました。まいた雪はどんどんとけました。

「雪さん、もうお別れだね」

「ええもう、けれどあなたといられて楽しかったですよ」

ありがとう、とつぶやいて雪のさいごのひとつぶがとけました。
また会いましょう、とつぶやいて、たびかぜはさいごの雪が落ちた場所を見ました。

そこには、小さな黄色の花がありました。たんぽぽです。たんぽぽはとけた雪のつぶのせいで、ぴかぴかとぬれていました。

（雪さんが、あのたんぽぽの新しいのちになったんだ）

たびかぜは少しばかり悲しくなつて、そしてうれしくなつて、そのたんぽぽに話しかけました。

「こんにちは、たんぽぽさん。もう花が咲きましたか」

たびかぜに初めて話しかけられたたんぽぽは少しおどろいて、はずかしそうにうつむきました。

「もうすぐ春ですね。ほら、お日さまが雲を取ってくれた。雪さんがとけて、おいしい水になつてくれますよ」

たんぽぽはやはりはずかしそうにうなずくだけでした。

「ではまた、きれいなお花を咲かせてくださいね」

しかたなく、たびかぜはいったんそこからはなれることにしました。

それからお日さまとお月さまが何回か交代しました。たびかぜはたんぽぽのことが気になっていました。

こんにちは、今日はさむいですね。こんにちは、今日は少し急ぐので早めに行きますがゆるしてくださいね。そのうちにたんぽぽも笑ってくれるようになりました。

たびかぜはたんぽぽのことが好きになりました。たんぽぽも、きつとそうだったにちがいありません。

たびかぜがほうくくすることは、いつしかたんぽぽのことばかりになってしまいました。お日さまもお月さまもお星さまも、苦笑いしてそれを聞いていました。

そうして、どれくらいたったのでしょうか。

お日さまはいつもよりずいぶんとあたたかく世界をてらしていました。

「こんにちは、たんぽぽさん」

へんじがありません。苦しそうな声が聞こえました。

「かぜさん、かぜさん。ああ、そろそろお別れみたいです」

「どうですか」

たびかぜはびっくりして走るのをやめました。

「わたしの子どもがたびだつ時が来たようです。わたしは見送らなければ」

「あなたはどうなるんですか」

「わたしは、もう何年もここにいました。けれど、もう根が弱くなつてしまいました。今年で終わりです。よくしてくれてありがとうございます」

「たびかぜはたんぽぽのことを信じませんでした」

「いいえうそです。またあなたに会えます」

「ほんとうです。ああ、お日さまがあんなにきらきらして。とてもあつくてかないません」

それを聞いたたびかぜは、まっさきにお日さまのところへ行きました。

「お日さま、お日さま。少し光を弱めてください。たんぽぽが死んでしまいます」

お日さまはその願いを聞きませんでした。

「お前は自分のしごとをわすれてはいないか。お前のしごとはたんぽぽの子どもたちをたびに出してやることだろう」

そうです、お日さまはたびかぜがたんぽぽばかり気にかけてしごとをまるでしていないのに怒っていたのです。たんぽぽもそれを知っていました。

お日さまはまたかつかと光をはなち始めました。

たびかぜは雲のところへ行きました。

「雲さん、雲さん。お願いです。あのたんぽぽを守ってやってはくさいませんか」

「いいえそれはできません。わたしは今あのかえるの子たちを守っているのです。池がひあがらないように」

「では、雨を降らしてください」

「できません」

雲もまた、お日さまのめいれいでたびかぜの言うことはきかないように、と言われていたのです。

だれに助けを求めても、どうにもなりません。雪がとけてたんぽぽのいのちとなったように、たんぽぽが子どもを送り出すことはしかたのないことでした。

たびかぜはふらふらとたんぽぽのもとへもどってきました。たんぽぽはもう、まっしろな子どもたちに囲まれていました。

「さよならです。かぜさん。わたしの子どもをつれていってください」

「できません。あなたとお別れしたくありません」

「お願いです」

たんぽぽの願いを、きかないわけにはいきませんでした。たびかぜはしかたなく、はい、と答えました。

「では、約束してください。あなたの子どもをぜんいんはこんだら、また会いにきます。それまで待つていてくれますね」

「はい、きつと」

それを聞くと、たびかぜは安心してたんぽぽの子どもたちをそつと丁寧にはこびました。

どこへ行くのか、わたしお花の王女さまになりたいわ、ぼくはさばくでもまけない強い花になるんだ。たびかぜはそれをやさしく笑って聞きながら、子どもたちが自分でえらんだ場所へ、一人一人おろしていきました。

そしてせかいじゅうをめぐった後、たびかぜはたんぽぽのもとへもどって来ました。

たんぽぽは、やさしく笑って地べたにたおれていました。とてもとても、うれしそうでした。

「たんぽぽさん」

たんぽぽは答えませんでした。

「約束したじゃありませんか」

たびかぜは泣きました。そうして、いてもたってもいられずに、ぼうぼう、びゅると今までにないはやさで走り出しました。みんながひめいをあげました。

「かぜさん、そんなに早く走ったら葉っぱがみんなおちちゃうよ！」

「かぜさん、わたしのえだが折れてしまいます、お願いですから！」

たびかぜは聞きませんでした。たんぽぽがいなくなった悲しみで、もう何かなんだかわからなくなっていたのです。

ふと、かぼそい声が聞こえました。

「こわいよ、お母さん」

それはあのたんぽぽの子どもでした。

よく耳をすませると、聞き覚えのある声が、あちこちから、こわいよ、さむいよ、と泣いています。

（たんぽぽさんの子どもを死なせてはならない）

ようやくたびかぜは走るのをやめました。みんながほっとしました。

たびかぜはお日さまからもお月さまからもお星さまからも怒られました。たびかぜはだまって聞いていました。

そうしてまた、もとのしごとにもどりました。

さびしくなんかありませんでした。

「やあ、どうだいさばくは」

「かぜさん、こんにちば。あついけれどぼくがんばるよ」

「やあ、もう少しで花が咲くね」

「ええ、いっとうきれいな花を咲かせるわ！」

たんぽぽの子どもたちを見守るのが、もう一つのおしごとになったからです。

そうしてたびかぜは、今日も世界中をまわっています。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5142a/>

たびかぜとたんぽぽ

2010年10月8日15時09分発行